

3. 標野寮新營工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内O-21・22区、P-22区

調査面積 48m²

調査期間 平成24年11月16日～11月28日

調査担当 横山成己 松浦暢昌

調査結果

(1) 調査の経緯(図43、写真64・65)

吉田構内南端部に位置する標野寮(女子学生寮)南方空闊地に新たな女子学生寮を建設する計画が確定したことを受け、開発予定地を対象に予備発掘調査を実施する運びとなった(平成24年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会メール審議(9月10日～12日)にて承認)。

既設の標野寮は、本学において埋蔵文化財保護業務が開始された昭和41年(1966)には既に建設工事が実施されていたため、敷地の地下の状況確認が行われていない。現況地形を見る限りでは、敷地の東端部において東側から西に延びる丘陵が深度約3m程カットされているようであるが、削平範囲が不明確である。また、敷地の東に隣接する牧草地では、平安時代から鎌倉時代の集落跡と推察される柱穴群や溝が密に確認されていることから、新寮建設予定地内に東西37m、南北11.8mのL字形トレチを設定し、地下の様相を確認することとなった。

【註】

1)山口大学吉田遺跡調査団(1976)『山口大学構内・吉田遺跡発掘調査概報』、小野忠熙(編)、山口

横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報3－平成17年度－』、山口

(2) 調査の経過(写真66)

図書館改修工事及び環境整備工事に伴う本発掘調査が11月14日に終了したため、翌15日に発掘機材等の搬出入を行い、16日(金)より調査に着手した。

重機掘削を実施すると同時に遺構検出、調査区断面精査を並行して進め、20日までに重機掘削お



図43 調査区位置図



写真64 調査地遠景(南から)



写真65 調査前全景(西から)

より遺構掘削まで終了した。21・22・26日の3日間は諸記録作業に当て、27・28日の2日間で埋め戻しを完了し、調査終了となった。

(3) 基本層序(図44・45、写真69・70)

事前の推測どおり、東西トレントの東部(丘陵高所側)は表土および造成土直下が地山であり、大きく削平を受けていることが判明した。東西トレント西部および南北トレントにおいては、造成土下に本学吉田地区統合移転前に存在した棚田の耕作土を確認した。耕作土下は地山であった。

(4) 遺構(図44・45、写真67・68)

地山を遺構面検出面として、溝を7条検出した。溝1・2・5は北東—南西方向の溝で、位置関係から溝2は溝5に繋がるものと思われる。また、溝1の南東に接して畦畔が確認された。溝3・4は上記の溝に直行する方向で設けられており、両者は本学移転前の水田区画を示すものと思われる。溝6・7はやや方向を進えており、北北西—南南東に走る。前述の溝より時期が遅ると見られ、溝6埋土からは須恵器の出土も見たが、土質としては新しく、旧の水田区画に伴うものと思われる。

この他、東西トレント東端部付近に土壤状の凹みを1箇所確認した。埋土の土質から土地の削平に伴うものである可能性が高い。

(5) 遺物(図46、写真72、表7)

溝6および旧耕土から須恵器、土師器が出土しているが、極めて少量である。なお、溝6出土須恵器は前述のように2次的な混入と考えられる。

1は溝6出土の須恵器甕体部片。外面にはほぼ垂直の平行叩き後カキ目が施される。内面の同心円当て具痕は明瞭に残る。**2**は須恵器蓋口縁部片。小片のため口径復元不能である。扁平な坏蓋と見られ、天井部から屈曲して口縁が降下し、端部をわずかに外反させる。全面に回転ナデが施される。胎土および焼成は堅緻である。**3**は須恵器壺肩部片。こちらも小片であり正確に径を復元できないが、肩部が正円であるとすると、器壁が厚いものの9cm程度の小型品になると思われる。内外面とも丁寧にナデが施されており、他の成形・調整痕は観察されない。外面肩部直上に沈線状の凹みが存在する。**4**は須恵器甕の肩部片と思われる。頸部付近の破片と見られ、外面下位に右上がりの平行叩きが施され、内面下位には同心円当て具痕が残る。内外面とも上位はナデが施されている。

(6) 小結(写真71)

本学の吉田地区統合移転では、昭和41年(1966)に移転を完了させた農学部を皮切りに、昭和48年(1973)に移転が終了するまで、学部校舎を始めとする建築物やライフラインの整備など、急ピッチで開発工事が実施された。工事中に発見される埋蔵文化財の保護対応のため、本学では昭和41年より、当時教育学部の教官であった小野忠熙氏が学生を率い発掘調査に当たった。翌昭和42年には市川禎治学長を団長とする山口大学吉田遺跡調査団が結成され、遺跡保護のための発掘調査が実施される事となるが、すでに工事が終了した場所、工事が進行中である場所、また予察調査で本発掘調査は必要ないと判断された場所では地下の様相が不明となってしまった。吉田構内の権野寮もその事例の一つであり、昭和41年10月のものと見られる吉田第Ⅱ地区の調査写真には、建物本体工事中の権野寮が映り込んでいる。

吉田構内(吉田道路)の調査



写真 66 調査風景（西から）



写真 67 南北トレンチ完掘状況（南から）



写真 68 東西トレンチ完掘状況（西から）



写真 69 南北トレンチ北壁土壠断面（南東から）



写真 70 東西トレンチ北壁土壠断面（南西から）



写真 71 統合移転工事中の吉田構内（南から）

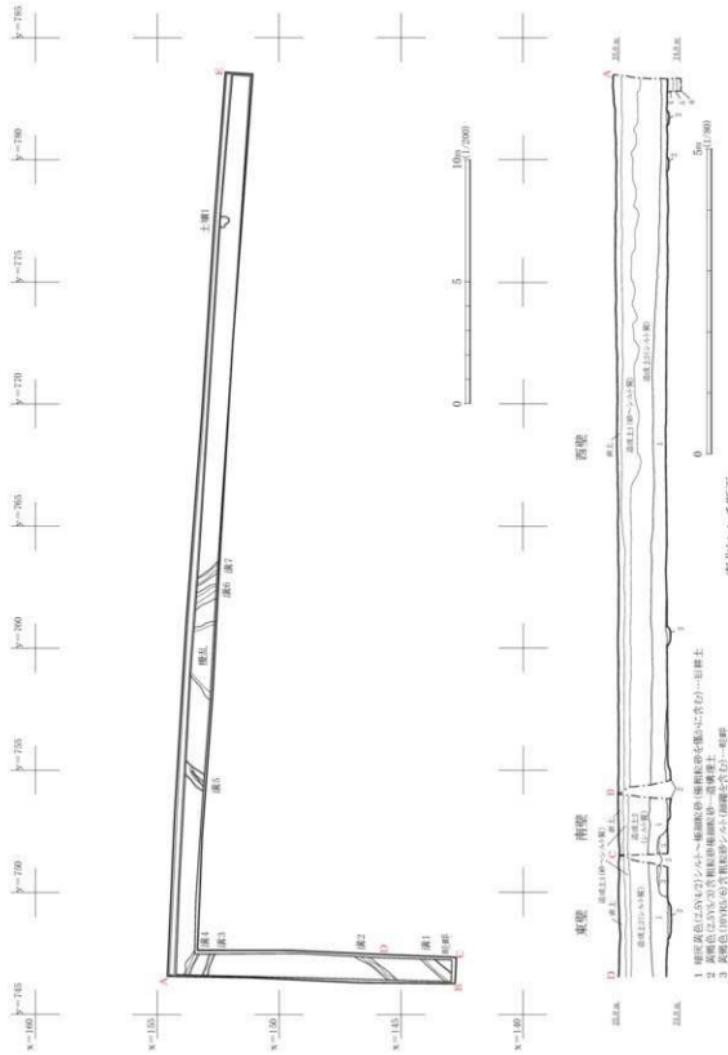


図44 調査区平面図・断面図

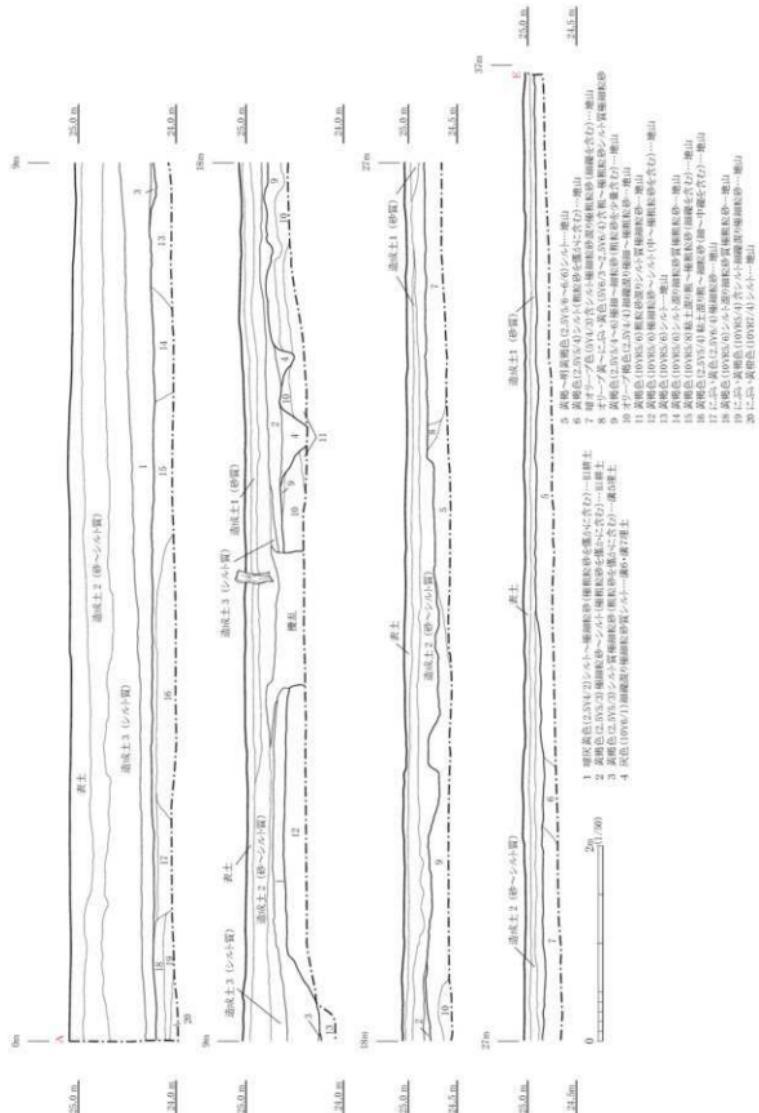


図45 東西トレンチ北壁断面図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

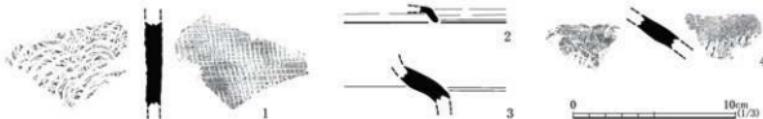


図46 出土遺物実測図



写真72 出土遺物

表7 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①○②△③△△基面	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	溝6 埋土	須恵器 壺	体部	①②灰白色(N7/)	精緻		
2	旧耕土	須恵器 蓋	口縁部 ③残高1.0	①②灰白色(N7/)	精緻		
3	旧耕土	須恵器 罐	肩部	①②灰白色(N7/)	密0.1~0.5mmφの砂粒極少量混ざる		
4	旧耕土	須恵器 壺	肩部	① 灰白色(7.5Y7/1) ② 灰白色(N7/)	密0.1~0.2mmφの砂粒極少量混ざる		

今回の調査は、工事立会を除けば権野寮敷地における初めての発掘調査である。調査の結果、敷地の東部は大きく削平を受けた状況で、遺構が遺存している可能性は極めて低く、敷地の西部も棚田の構築により削平を受けていることが明らかとなった。今回の調査により、当地において統合移転前の棚田が南東から北西方向に設けられていることが判明したが、明瞭ではないものの昭和41年に撮影されたと思われる吉田構内の航空写真(写真71)においても棚田の状況が確認できる。

新営される権野寮の建設範囲においては本発掘調査の必要はない、当工事計画の今後の埋蔵文化財保護対応は、配管等設備工事や既設権野寮の食堂解体工事において立会調査を実施する事が平成24年度第7回埋蔵文化財資料館専門委員会メール審議(12月5日~6日)にて承認された。

【註】

- 1) 横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報3—平成17年度—』、山口 の77頁写真91参照。

4. 第1学生食堂増築工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内I-19・20、J-20区

調査面積 約66.1m²(A調査区49.8m²、B調査区4.4m²、C調査区5.9m²、D調査区6m²)

調査期間 平成25年2月4日～3月4日

調査担当 田畠直彦・松浦暢昌

調査結果

(1) 調査の経緯(図47・48、写真73・74)

第1学生食堂では長年昼食時の狭隘状態が問題となっていたため、解消を目的として、建物南西側の7.6m×36mの範囲に建物の増築が計画された。また、工事計画地には既設管類が多数存在するため、増築部の東側に配管類を移設する工事も合わせて計画された。

平成23年度末において工事内容が未定であったため、埋蔵文化財保護対応も未定であったが、平成24年度に工事概要が決定した。未定の事業には埋蔵文化財資料館員と協議の上、館長裁量で対応を決定することとなっているが、計画地が遺跡保存公園に隣接すること、平成5年度の立会調査の際、B調査区北西側で統合移転前の水田床土が検出され、その直下に遺構が存在する可能性があること、第1学生食堂の建物南東側では統合移転時に発掘調査が行われ、流路(弥生時代河川か)が検出されていることから、予備発掘調査を実施することになった。

工事計画地内には多数の既設管と大学生協本部(仮設プレハブ)が存在していたため、調査にあたっては、これらを避けてA～Dの調査区を設定した。

【註】

1) 河村吉行(1991)「付篇II 吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(總括)」山口大学理蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報IX』,山口

2) 豊谷和之(1995)「第4章10 環境整備(遺跡保存地区)に伴う立会調査」山口大学理蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X III』,山口

3) 山口大学吉田遺跡調査団(1976)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』,山口



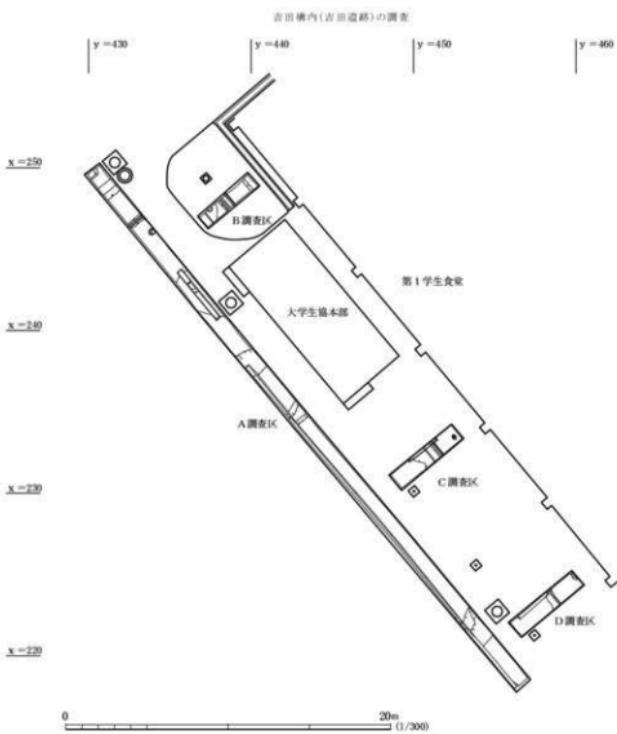
図 47 調査区位置図



写真 73 A・C・D調査区調査前全景（南から）



写真 74 B調査区調査前全景（北西から）



(2) 基本層序

基本層序は下記の通りである。

- 第1層：表土（層厚5～10cm）
- 第2層：造成土（層厚20～70cm）
- 第3層：旧水田耕土（層厚2～7cm B調査区のみ）
- 第4層：旧水田底土（層厚2～8cm B・C調査区のみ）
- 第5層：遺物包含層か（層厚6cm）B・C調査区のみ。
- 第6層：地山（弥生時代以降の遺構面 層厚64cm以上）

(3) 層序・遺構

a.A調査区

大規模な削平を受けていたため第3～5層ではなく、現地表下約50～80cmまでが第1・2層で、その直下で第6層を検出した。第6層の検出標高は南部で約18.6m、北部で約18.3mである。なお、遺跡保存公園最南端の第21号堅穴住居の検出標高は約19.4m、A調査区北部西側に位置する第13号堅穴住居の検出標高は約19.2mである。旧地形は東側にかけて落ち込むことを考慮しても、第6層は大規模な削平

を受けたと考えられる。

遺構は第6層上面で河川3条、ピット1基を検出した。調査区南端部で検出した河川1は幅4.8m以上、最深部は約60cmである。埋土は上層が黄灰色粗砂、下層が灰色粘土で自然木を含み湧水が顕著であった。下層からは弥生土器片が少量出土した。河川2は幅約4.4m、最深部は約66cmである。埋土は上層が灰オーブ色粗砂、下層が黄褐色粗砂で湧水が顕著であった。遺物は出土しなかった。河川3は幅3.5m、最深部約45cmである。埋土は上層から黄灰色シルト、灰色粗砂、暗褐色粗砂、灰色礫である。埋土の中へ下位から土器片(弥生土器か)が少量出土した。Pit1は直径40cm、深さ9cmである。埋土は黒褐色シルトである。遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、埋土の色調から弥生～古墳時代の遺構である可能性が高い。

b.B調査区

現地表下約30～50cmまでが第1・2層で、以下約50～55cmで第3層、約55～60cmで第4層、約60～66cmで第5層、約65cm以下で第6層を検出した。第6層上面の検出標高は約18.8mである。A調査区と異なり、第3～5層が残存していた。遺物は出土しなかったが、第5～1層は遺物包含層の可能性がある。

第5～1層上面では河川を検出した。埋土は灰色粗砂に灰オーブ色の礫を含む。ただし、南西側が擾乱を受けていたため、ごく一部の検出にとどまり、遺物も出土しなかった。位置関係から、河川はA調査区河川3と同一である可能性が高い。また、河川埋土直下の第6～1層上面で直径22cm、深さ33cmのピット1を検出した。遺物が出土しなかったため、時期は不明であるが、埋土の色調から弥生～古墳時代の遺構である可能性が高い。

c.C調査区

調査区の大半は既設管等の擾乱を受けており、現地表下約55cmまでが第1・2層で、その直下で第6層を検出した。調査区東部は現地表下約25cmまでが第1・2層で、約25～34cmで第4層、約34～38cmで第5層、約38cm以下で第6層を検出した。第5～1層はB調査区検出層と同一とみられるが、遺物は出土しなかった。第6層の検出標高は約19.0mである。

北西壁では第5層から掘り込まれた径17cm、深さ7cmのピットを検出し、北東壁では杭跡2箇所(径4cm・深さ10cmと径2cm・深さ5cm)を検出した。また、第6層上面でも直径32cm、深さ29cmのピット1を検出した。第5～1層と遺構埋土が近似していたことから、このピットも第5～1層から掘り込まれていた可能性がある。以上の遺構から遺物は出土しなかったため時期は不明であるが、埋土の色調から弥生～古墳時代の遺構である可能性が高い。

d.D調査区

C調査区同様、調査区の大半は既設管等の擾乱を受けていた。現地表下約60cmまでが第1・2層で、以下約60～114cmで河川埋土、約74～120cmで第6層を検出した。河川は最深部が約54cmで、埋土は暗赤褐色の粗砂・礫である。下部は湧水が顕著であり、弥生土器片が少量出土した。位置関係から、河川はA調査区河川1と同一と考えられる。

【註】

1) 河村吉行(1990)「付篇 I 吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和60・61年度)」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』,山口

2) 河村吉行(1987)「付篇 I 吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』,山口

吉田橋内(吉田道路)の調査

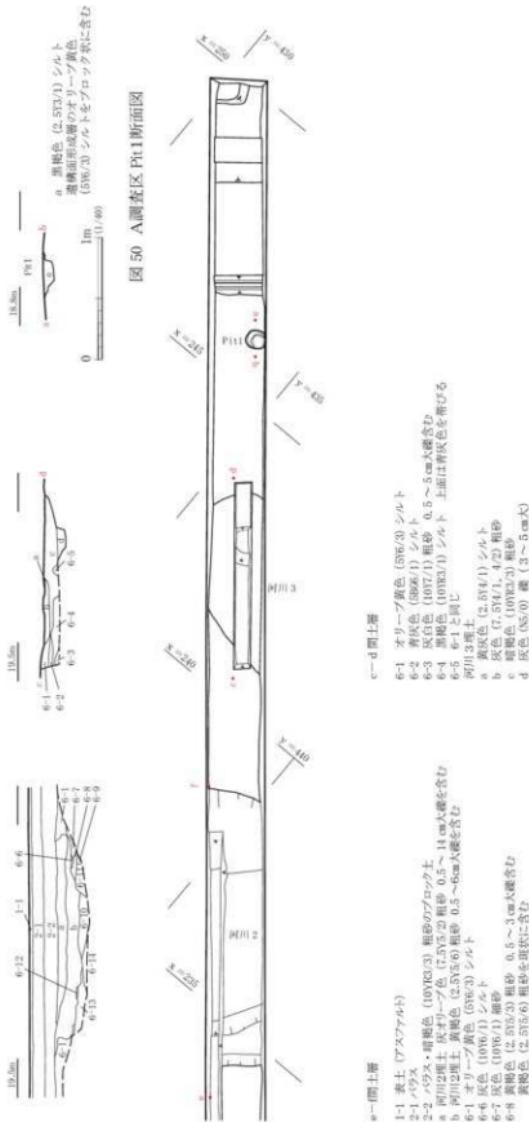
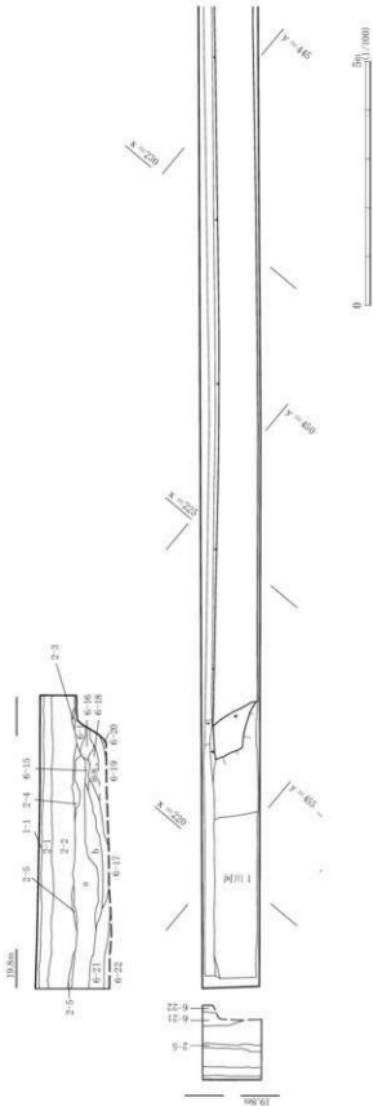


図 49 A調査区北西部平面図・土層断面図



- 1-1. 基土 (アスファルト)
 2-1. グラス
 2-2. ベニガナ・緑褐色 (09NC3/3) 粗砂のブロック土 2-3 マサ・6-1のブロック土
 2-4 マサ・6-1, 黄褐色 (6806/1) シルトのブロック土
 2-5. 黄色 (G. 05/1) シルト
 6-15 オリーブ褐色 (2. 56/1) シルト
 6-16 オリーブ褐色 (56/1) シルト
 6-17 緑灰色 (7. 56/1) シルト
 6-18 オリーブ褐色 (2. 56/1) シルト
 6-19 オリーブ褐色 (56/1) 粗砂 0.5 ~ 3 cmの大粒含む
 6-20 黄色 (7. 3V/1) シルト
 6-21 黄色 (06/1) 粗砂 0.5 ~ 3 cmの大粒含む
 6-22 6-1と同じ
- a 黄褐色 (2. 5V6/1) 粗砂 (0. 5 ~ 10 cm大粒含む)
 b 黄色 (09NC3/1) シルト・自然木を含む

図 51 A調査区南東部平面図・土層断面図

吉田橋内(吉田道路)の調査



図 52 B調査区平面図・土層断面図

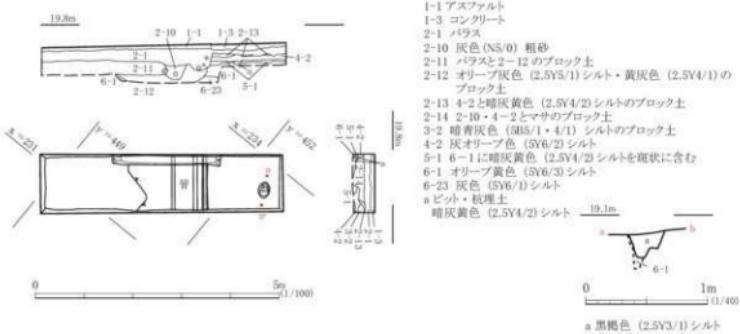


図 53 C調査区平面図・土層断面図

図 54 C調査区 Pt1断面図

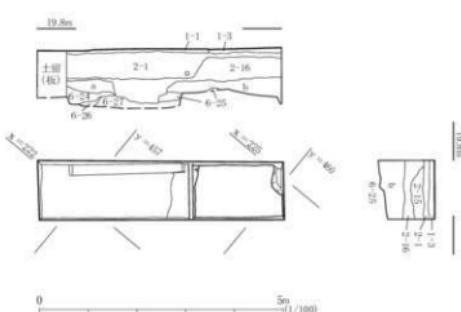


図 55 D調査区平面図・土層断面図

吉田橋内(古井道路)の調査



写真75 A調査区全景(南東から)



写真76 A調査区Pit1半裁状況(南西から)



写真77 A調査区河川1土層断面(東から)



写真78 A調査区河川2土層断面(南東から)



写真79 A調査区河川3土層断面(南東から)



写真80 B調査区全景(南から)



写真81 B調査区Pit1土層断面(南東から)



写真82 C調査区全景(南から)



写真83 C調査区東部北西壁土層断面(南東から)



写真84 D調査区全景(南から)



写真85 D調査区西部北西壁土層断面(南東から)

(4) 遺物(図56・写真86)

今回出土した遺物はいずれも小片で、図化できるものは少ない。1はA調査区第6-1層上面出土。弥生時代中期の甕口縁部で、跳ね上げ口縁である。2~3はD調査区機械掘削時出土。河川埋土もしくは攪乱土に含まれていたと考えられるが、本来的には河川埋土に含まれていた可能性が高い。2は弥生時代前期後半～中期前半の鉢口縁部。口縁部をわずかに肥厚させる。3は弥生時代中期の壺もしくは鉢の底部。内外面にヨコミガキを施す。4はD調査区床面清掃時出土。弥生時代中～後期の壺もしくは鉢の底部。摩滅が激しい。

(5) 小結

今回の調査の結果、工事予定地は削平・攪乱が著しく、B・C調査区の一部を除いて第2層直下で第6層が検出された。また、A調査区で河川3条、B調査区で河川1条、D調査区で河川1条を検出した。これらの河川は遺跡保存公園で検出された河川と同一である可能性がある。ただし、遺跡保存公園の河川では埋土下部・上部で須恵器が出土していることから、古墳時代後期から奈良時代にかけて機能していたと推測されているのに対して、今回の調査区からは須恵器類が出土しなかったため、断定はできない。統合移転時に建物南東側で検出された流路との関連も考慮する必要があろう。また、ピットがA調査区で1基、B調査区で1基、C調査区で1基検出された。これらのピットから遺物は出土しなかったが、埋土の色調から弥生～古墳時代に属する可能性が高く、竪穴住居もしくは掘立柱建物の一部である可能

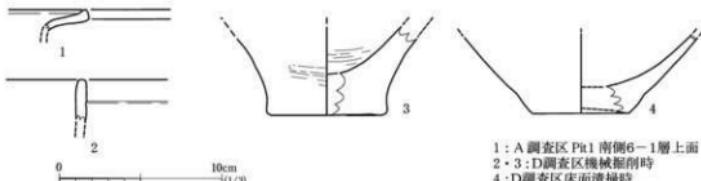


図 56 出土遺物実測図



写真 86 出土遺物

表8 出土遺物(土器)観察表

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm)		色調 ①外面 ②内面	胎土	備考	法量()は復元値
				①口径	②底径				
1	A調査区 Ph1 南側6-1層上面	赤生土器 鉢	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR7/2) ②褐色(5YR6/6)	0.1~3mmの砂粒を含む		
2	D調査区 機械掘削時	赤生土器 鉢	口縁部			①淡黄褐色(10YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	0.1~4mmの砂粒を含む		
3	D調査区 機械掘削時	赤生土器 磁もしくは鉢	底部	②(7.4)		①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~4mmの砂粒を含む		
4	D調査区 床面清掃時	赤生土器 磁もしくは鉢	底部	②(6.0)		①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1~4mmの砂粒を含む		

性がある。しかし、これらのピットの周囲は既設管等による擾乱が顕著であり、建物の復元は困難であることが推測された。

上記の調査結果について、平成24年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会(3月29日)で審議を行った。その結果、遺構は検出されたものの擾乱が著しい上、既設管の老朽化により、既設管を残したまま広範囲で調査を行うことが安全確保上困難であることから、工事施工時に立会調査を行うことになった。

【註】

1) 河村吉行(1987)「付篇 I 吉田構内遺跡保存地区の発掘調査(昭和59年度)」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』,山口

2) 山口大学吉田遺跡調査団(1976)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』,山口

5. 陸上競技場トラック排水溝改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内D-17~19、E-17・19、F-16~19、G-16~18区

調査面積 約495m²

調査期間 平成24年12月26日

調査担当 田畠直彦・横山成己・松浦暢昌

調査結果

近年、陸上競技場の排水状況が不良で、使用に支障をきたしているため、排水溝改修工事が行われることとなり、掘削後に立会調査を実施した。工事はトラックの周囲を約120cm幅で現地表下40~50cmまで掘削を行うものである。調査の結果、A~H地点で河川及び造構を確認した。以下で各地点の状況を報告する。

A地点は現地表下20cmまでが表土で、以下20~30cmが旧水田床土である灰オリーブ色(5Y4/2)シルト、35~40cmが地山であるオリーブ黄色(5Y6/3)シルトで、同層上面を検出面とする溝2条を検出した。SD1は最大幅120cmで、埋土は黄灰色(2.5Y4/1)シルトであった。SD2は最大幅360cmで埋土は灰色(N5/0)粘質土であった。SD1・2から遺物は出土しなかった。

B地点は、現地表下10cmまでが表土で、以下10~28cmが旧水田床土である灰オリーブ色(5Y4/2)シルト、28~40cmが地山であるオリーブ黄色(5Y6/3)シルトで、同層上面を検出面とする溝1条を検出した。SD3の最大幅は130cmで、埋土は灰色(N4/0)シルトであった。遺物は出土しなかった。

C地点は、現地表下18cmまでが表土で、以下18~27cmが旧水田耕土である灰オリーブ色(5Y5/2)

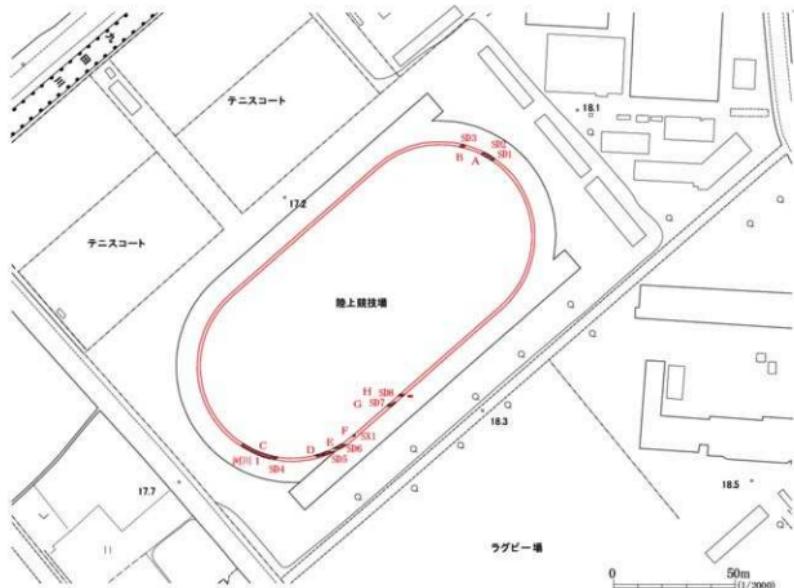


図 57 調査区位置図

シルト、27~41cmが旧水田床土である灰オーブ色(5Y6/2)シルト、41~53cmが地山であるオーブ黄色(5Y6/3)シルトで、同層上面を検出面とする河川1条、溝1条を検出した。河川の幅は14m程度で、埋土は灰黄色(2.5Y4/1)シルトである。SD4の最大幅は100cmで、埋土は灰黄色(2.5Y4/1)シルトである。共に遺物は出土しなかった。以下、D~H地点は層序が近似するため、層序の詳細は記載を省略し、地山で検出した遺構について述べる。

D地点では、現地表下42cmの掘削底面で直径15cmのピット2基を検出したほか、現地表下17cmの地山を検出面とする幅120cmの溝(SD5)を検出した。埋土は共に黄灰色(2.5Y4/1)で、遺物は出土しなかった。

E地点では、現地表下15cmの地山を検出面とする最大幅200cmの溝(SD6)を検出した。埋土は灰オーブ色(7.5Y5/2)粗砂である。遺物は出土しなかった。

F地点では、現地表下12cmの地山を検出面とする幅40cm、深さ26cmの不明遺構を検出した。埋土は黄灰色(7.5Y4/1)シルトである。遺物は出土しなかった。

G地点では、現地表下20cmの地山を検出面とする最大幅240cmの溝(SD7)を検出した。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)シルトで、微細な土器片が出土した。

H地点では、現地表下18cmの地山を検出面とする最大幅75cmの溝を検出した。埋土は黄灰色(2.5Y4/1)シルトである。遺物は出土しなかった。

以上、検出した河川と遺構は上面の検出にとどまった関係で遺物がほとんど出土していないので、時期は不明である。ただし、埋土の色調から弥生~古墳時代である可能性が高い。河川と溝については、平成6年度に実施した体育器具庫及び便所新設に伴う試掘調査¹⁾、平成7年度に実施した公共下水道接続工事に伴う試掘調査・本調査、基幹環境整備に伴う立会調査でも検出されており、関連が注目される。

【註】

- 豆谷和之(2000)「第4章3 吉田体育器具庫及び便所新設に伴う試掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X IV』,山口



写真87 A地点(SD1)南西壁土層断面(北東から)



写真88 A地点(SD2)南西壁土層断面(北東から)



写真89 B地点(SD3)南西壁土層断面(北東から)



写真90 C地点西端部北東壁土層断面(南西から)



写真91 C地点東端部北東壁土層断面(南西から)



写真92 D地点西端部SD5・ピット検出状況(南東から)



写真93 E地点(SD6)北西壁土層断面(南東から)



写真94 F地点(SD1)北西壁土層断面(南東から)



写真95 G地点北西壁(SD7)土層断面(南東から)



写真96 H地点北西壁(SD8)土層断面(南東から)

6. 人文・理学部管理棟EV設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内M-20区

調査面積 42.75m²

調査期間 平成24年9月21日

調査担当 横山成己

調査結果

人文・理学部管理棟は、昭和58年(1983)に理学部大学院校舎として建設され、建設時に立会調査が実施された。¹⁾報告には図や写真が掲載されていないが、旧耕作土下に4層の無遺物層を介在して現地表下120cmで黄褐色粘土の地山に到達すると記述されている。

平成24年度に建物西側玄関前にエレベーターを設置する工事が計画された(図58)が、掘削深度が地山に到達する120cmであること、建設工事の立会調査で地山上の堆積層を無遺物層と断定するのは事实上困難であることから、慎重を期して立会調査を実施する運びとなった。

調査において確認された層序は、現地表下100cmまでの表土および造成土の下に、①層厚12cmの灰黒色粘質土、②層厚8cm以上にのぶい灰黄色弱粘質土である(図59、写真97)。①は吉田構内造成前の旧耕土、②は旧床土と見られる。

人文学部校舎敷地の旧地形は東から西に降下しているようで、今回の調査では掘削は耕作土内にとどまり、昭和58年に確認された地山まで到達しなかった。人文・理学部周辺の地下の様相は不明確な部分が多いため、新たな工事に際しては基礎的データの獲得に努めたい。

【註】

- 1)河村吉行(1985)「理学部大学院校舎新設および付随工事に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』、山口

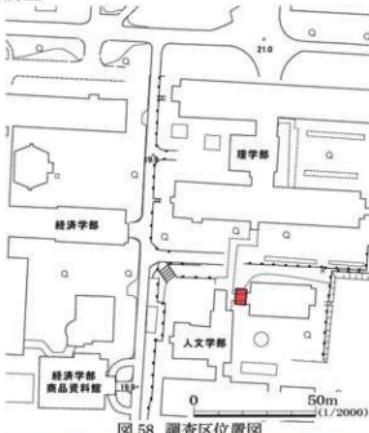


図58 調査区位置図



写真97 調査区西壁土層断面(東から)

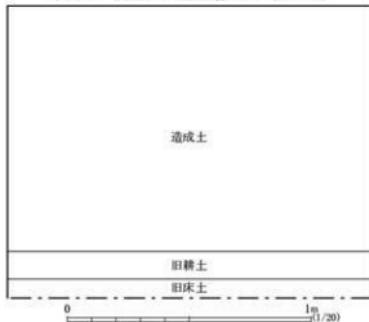


図59 土層断面柱状図

7. 農場本館事務室等改修機械設備工事に伴う立会調査



図 60 調査区位置図



写真 98 B地点土層断面（北西から）



図 61 B地点土層断面柱状図

調査地区 吉田構内R-13区、S-13区

調査面積 27m²

調査期間 平成24年11月16・20日

調査担当 横山成己

調査結果

平成24年度に農学部附属農場本館建物の改修工事が計画された。農学部本館建物は、昭和42年(1967)に竣工しているが、昭和41年(1966)に小野忠熙氏により実施された吉田遺跡第IV地区牛舎新営に伴う発掘調査で10月に撮影されたと思われる写真に、建設中の農場本館建物が映り込んでいる。小野氏により埋蔵文化財保護対応が図られた記録が残っていないため、建物地下の様相は不明となっている。今回の工事計画では、建物周囲に新規配管が設けられる事となったため、工事立会を実施する運びとなった。

立会調査はA・Bの2地点で実施した(図60)。A地点では、現地表下100cmまで掘削が行われたが、造成土内にとどまった。B地点では、現地表下120まで掘削が行われ、造成土下の現地表下75cm地点で、地山である赤褐色岩盤風化層を確認した(図61、写真98)。

調査の結果から、農場本館建物は東に近接する丘陵傾斜地を削平して建設された可能性が高い事が判明した。岩盤風化層が露出する事から、削平深度は相当に深く、建物周囲に遺構が遺存する可能性は極めて低いと推定される。一方で牛舎新営に伴う発掘調査では、複数の堅穴住居跡や溝、ピット等が確認されており、削平深度が浅かった場所には埋蔵文化財が依存する可能性が残されている。今後も地下の掘削を伴う工事計画には慎重な埋蔵文化財保護対応が必要である。

【註】

1)山口大学吉田遺跡調査団(1976)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』小野忠熙(編)、山口

8. 図書館改修その他工事(廃棄物プール設置)に伴う立会調査

調査地区 吉田構内K-10区

調査面積 25m²

調査期間 平成25年1月21日

調査担当 横山成己

調査結果

本発掘調査後に着工された図書館改修工事及び基幹環境整備工事に伴い、開発部局より、大量に排出される廃棄物の仮置き場(プール)が必要であるとの相談を受けた。プールの必要規模は、5m×5m×深度1mとのことで、場所によっては埋蔵文化財を大きく破壊する可能性のあるものであったため、九田川(氾濫原)に近く、かつ造成土も厚いと想定される吉田構内北部の蓮池公園とビオトープの間の空閑地が選定された(図62)。

プール掘削終了後に実施した立会調査では、20cmの表土下に80cmの造成土を検出し、掘削が造成土内にとどまったことを確認した(図63、写真99、写真中央の黒色土が表土で、その上位は掘削排出土)。

今回の工事計画は、図書館改修工事中に急遽立案されたもので、緊急の対応が必要であることが山口市教育委員会の多大なる支援と指導を得ることとなった。本学開発部局には、今後は様々な状況を想定した上で工事計画を立案するよう要求し、理解を得ることとなった。



図62 調査区位置図



写真99 調査区西壁土層断面(東から)

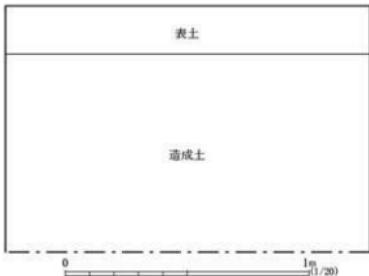


図63 土層断面柱状図

9. 国際交流会館1号館引込給水管改修工事に伴う立会調査

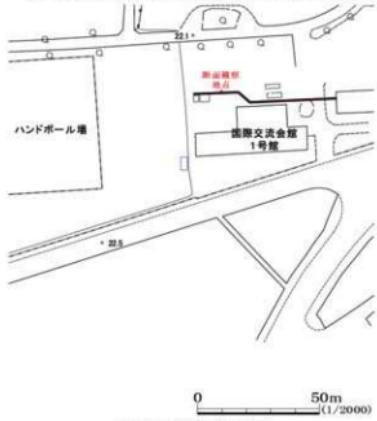


図 64 調査区位置図



写真 100 土層断面（東から）



図 65 土層断面柱状図

調査地区 吉田構内M・N-22区

調査面積 15m²

調査期間 平成24年7月4日

調査担当 横山成己

調査結果

平成24年度、吉田構内国際交流会館の給水管改修工事が立案された。建物北側に部分的に新たに給水管を埋設する計画であるが(図64)、国際交流会館新宮に伴う発掘調査では、建物周辺は主に表土表土直下が地山であり、溝や自然河川も確認されていたため、工事立会にて埋蔵文化財保護対応を行う運びとなった。

掘削規模は幅50cm×深度50cmで、新規埋設ルートに限り立会調査を実施した。調査の結果、現況の芝生の下位は50cmまで造成土であり、地山は露出していない事を確認した。

国際交流会館1号館は竣工後約30年が経過し、大幅な改修工事時期が近づいているものと予測される。計画が立案された際には適切な埋蔵文化財保護対応を行う所存である。

【註】

- 1) 河村吉行(1987)「吉田構内国際交流会館新宮に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』,山口

第3節 白石構内(白石遺跡)の調査

1. 教育学部附属幼稚園遊具設置工事

に伴う立会調査

調査地区 白石構内幼稚園北側中庭

調査面積 0.35m²

調査期間 平成24年10月23日

調査担当 横山成己

調査結果

教育学部より、白市地区に立地する付属幼稚園に新たに遊具(シーソー)を設置したいとの相談が寄せられた。

設置予定地は、園内北部中庭の池の南隣りであり、掘削規模は70cm×50cm×深度40cmと狭小なものであった(図66)。平成21年度に実施した池の改修工事に伴う立会調査では、地山と見られる黄色粘土層を切り込む正確不明の落ち込みが確認されたため、慎重を期し工事立会にて対応する事となつた。

調査の結果、表土下は造成土であり、造成土下に構造物の基礎と見られるコンクリートが確認された(図67、写真101)。立会調査に立ち会った園職員に尋ねたところ、「今回開発地のあたりには過去に教育学部川口政宏教授(当時)から寄贈されたオブジェが存在していた」とのことであった。オブジェ設置工事の記録は当館には存在しないことから、文化財保護法の手続きなしに実施されたものと思われる。埋蔵文化財包蔵地内での開発計画の手続きを学内に周知させ続けることの難しさを痛感する一件であった。

【註】

- 横山成己(2013)「教育学部附属幼稚園園内中庭池改修整備工事に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大埋蔵文化財資料館年報7~平成21年度』、山口

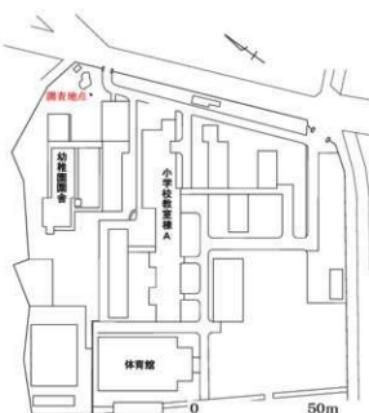


図66 調査区位置図



写真101 土層断面(南から)



図67 土層断面柱状図

2. 教育学部附属幼稚園園舎テラス取設工事に伴う立会調査



図 68 調査区位置図



写真 102 基礎掘削状況（北東から）

調査地区 白石構内幼稚園園舎北西側空閑地

調査面積 7.9m²

調査期間 平成25年3月13日

調査担当 横山成己

調査結果

教育学部附属幼稚園園舎北西側空閑地にテラスを取設する工事が立案された(図68)。150cm×150cm×深度50cmの基礎が5箇所に設ける計画であったが、計画地に近接して実施された既往の発掘調査において、弥生土器および土師器を包含する古墳時代前期の河川が確認されている事から、工事立会を実施する運びとなった。

実際の工事においては、掘削深度は30cmであり、表土下の造成土内にとどまった(図69、写真102)。教育学部附属幼稚園1期園舎は昭和47年(1972)の竣工であり、老朽化が著しい、近い将来の大規模改修も視野に入る事から、機会があるごとに立会調査を実施し、地下の情報収集を行う必要がある。

【註】

- 1) 古賀真木子・河村吉行(1991)「危山構内教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設に伴う発掘調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅳ』、山口

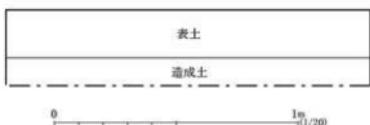


図 69 土層断面柱状図

3. 教育学部附属山口中学校看板表示設置工事に伴う立会調査

調査地区 白石橋内山口中学校東側進入路

調査面積 0.6m²

調査期間 平成24年8月24日

調査担当 河田徹也(施設環境部)

調査結果

教育学部より、附属山口中学校の看板を新設する工事計画が提出された。当初の工事計画では、テニスコートの東側道路沿いに看板を新設することと、工事立会での対応が埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認され、文化財保護法の手続きも行つたが、着工直前に設置場所が進入路入口に変更され(図70)、既設の基礎を取り除き同所に再度基礎を構築するという変更が行われた。

変更後の工事内容であれば埋蔵文化財保護対応は慎重工事が妥当と判断されるが、着工直前の工事位置および工法の変更であったため、本学側の工事責任者である河田徹也副課長に工事立会を代行していただいた。

掘削深度は100cmであり、造成土内にとどまっている旨報告を受けた(図71、写真103)。

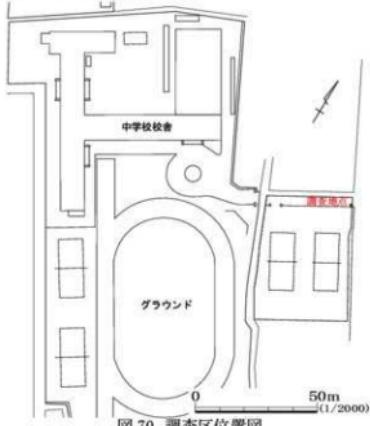


図 70 調査区位置図



写真 103 調査区西壁土層断面（東から）

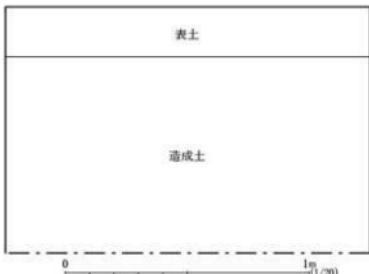


図 71 土層断面柱状図

4. 教育学部附属山口中学校テニスコート防球ネット嵩上げ工事に伴う立会調査



図 72 調査区位置図



写真 104 D地点土層断面（西から）



図 73 D地点土層断面柱状図

調査地区 白石構内山口中学校テニスコート東側

調査面積 4.8 m²

調査期間 平成25年3月27日

調査担当 横山成己

調査結果

教育学部により、白石構内附属山口中学校のテニスコート東側(公道側)防球ネットを更新する内容の工事計画が立案された。地下の掘削に関しては、防球ネットの支柱4箇所(図72)に対し、ボーリングで約200cm掘削するとの計画であった。既往の調査例もなく、工事計画地周辺の地下の状況は不明確であったため、ボーリング後に立会調査を実施する運びとなった。

調査においては手が届く範囲で断面精査を行ったが、造成土が厚いため地下の様相を確認できなかつた。唯一D地点で現地表下80cm地点に暗褐色粘土層らしきものが確認され、以下の明黄褐色粘土が地山である可能性が高いと推定された(図73、写真104)。山口中学校敷地では、平成19年度以降発掘調査が実施されておらず、新たな知見が得られていない状況にある。小規模な開発工事でも、工事立会を繰り返す事で地下の状況を確認する必要がある。

5. 教育学部附属山口中学校武道場新営植物移植工事に伴う立会調査

調査地区 白石構内山口中学校バレーボール場

調査面積 3m²

調査期間 平成24年3月12日

調査担当 横山成己

調査結果

平成25年度に教育学部附属山口中学校に武道場が新営されることとなり、予備発掘調査が実施される運びとなつたが、開発予定地の樹木を事前に移植したいという要求があり、工事立会にて対応する事となつた。

移植予定地は昭和61年(1986)に実施された污水排水管布設工事に伴う試掘調査の第4トレチに近接している(図74)。第4トレチの調査成果では、造成土直下が地山(暗緑灰色粘土)とされたが、その下位に暗オリーブ灰色細砂、さらに暗灰色粗砂が確認されている事から、それらの層が真に地山であるか確認する事を目的とした。

調査の結果、現地表下130cmの地点に旧耕土と見られる①暗灰色弱粘質土(層厚10cm)、その下位に旧床土と見られる②黄灰色弱粘質土(層厚10cm)、遺物包含層と見られる③暗灰褐色弱粘質土(層厚10cm以上)を確認した(図75、写真105)。

③層は湧水が著しく、埋没河川(谷)の埋積土である可能性が指摘される。この③層が昭和61年に地山とされた暗緑灰色粘土と同一である可能性が高い。いずれにせよ、平成25年度実施予定の武道場新営に伴う予備発掘調査で明らかとなるであろう。

【註】

- 杉原和恵(1987)「亀山構内教育学部附属学校污水排水管布設に伴う試掘調査 教育学部附属山口中学校部分の調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』、山口



図 74 調査区位置図



写真 105 調査区北壁土層断面（南から）



図 75 土層断面柱状図